

◎要旨(大意)と文章構造を示します。古典教材では、注意したい表現の文法情報も掲載しています。

評論

水の東西

要旨

「鹿おどし」は、日本人に水や時の流れといった流れてやまなものの存在を強調する仕掛けである。一方、噴水に見られるように、西洋では水は空間的な目に見えるものとして捉えられ、造形の対象となってきた。日本人は「行雲流水」という言葉に見られる、いっさいを自然に任せるという思想をもっているが、その思想は、形がなく自然に流れゆくものを好ましく感じるといふ日本人独特の感性に支えられているものである。

山崎正和

日本の「鹿おどし」と西洋の「噴水」の対比

◎第一段(時間を流れる水)

「鹿おどし」が動いているのを見ると、その愛嬌の中に、なんとなく人生のけだるさのようなものを感じることもある。かわいらしい竹のシーソーの一端に水受けがついていて、それに筧の水が少しずつたまる。静かに緊張が高まりながら、やがて水受けがいっぱいになると、シーソーはぐらりと傾いて水をこぼす。緊張が一気にとけて水受けが跳ね上がる時、竹が石をたたいて、こおんと、くぐもつた優しい音をたてるのである。5
見ていると、単純な、緩やかなリズムが、無限にいつまでも繰り返される。緊張が高まり、それが一気にほどけ、しかし何事も起こらない徒労がまた一から始められる。ただ、曇った音響が時を刻んで、庭の静寂と時間の長さをいやがうえにも引き立てるだけである。水の流れなのか、時の流れなのか、「鹿おどし」は我々に流れるものを感じさせる。それをせき止め、刻むことによつて、この仕掛けはかえって流れてやまないもの10

好ましさを感じさせたり、笑いをさそうような表情。

1 鹿おどし 庭園装置の一つ。本来は、その首で田畑を荒らす鹿や猪などを追い払うための仕掛け。「添水・しかおどし」ともいう。
2 筧 水を引いてくるために竹や木で削った樋。

問 「それ」とは何を指すか。流れるもの(46・9)

の存在を強調しているといえる。

私はこの「鹿おどし」を、ニューヨークの大きな銀行の待合室で見たことがある。日本の古い文化がいろいろと紹介される中で、あの素朴な竹の響きが西洋人の心をひきつけたのかもしれない。だが、ニューヨークの銀行では人々はあまりに忙しすぎて、一つの音と次の音との長い間隔を聴くゆとりはなさそうであった。それよりも窓の外に噴き上げる華やかな噴水のほうが、ここでは水の芸術として明らかに人々の気持ちをつくろがせていた。5

対照的な表現



鹿おどし 落柿舎保存会協力(アマナイメーجز提供)

鹿おどし

上げる華やかな噴水のほうが、ここでは水の芸術として明らかに人々の気持ちをつくろがせていた。

流れる水(鹿おどし)の水 || 自然な水
噴き上げる水(噴水)の水 || 人工的な水

◎第二段(空間に静止する水)

そういえばヨーロッパでもアメリカでも、町の広場にはいたるところにみごとな噴水があった。ちよつと名のあがる庭園に行けば、噴水はさまざまな趣向を凝らして風景の中心になっている。有名なローマ郊外のエステ家の別荘など、何百という噴水の群れが庭をぎつ15

10

3 エステ家 一三世紀中頃から一八世紀末にかけて、北イタリアで勢力を誇った封建貴族。

* 語句
愛嬌 徒労 趣向

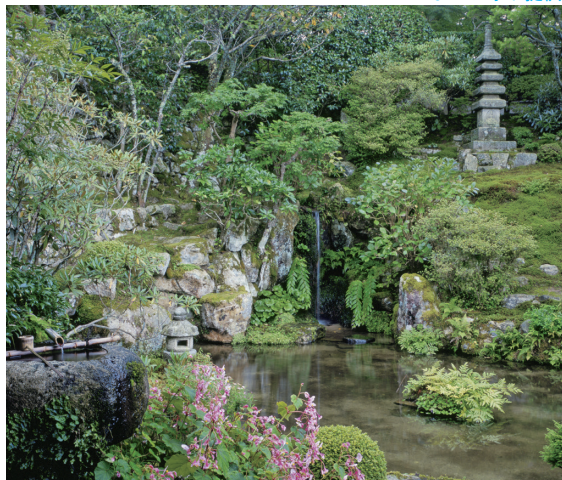
水の東西 45

◎脚注欄に掲げた語句は網掛けを施し、それぞれの語句の意味を掲載しています。



JTBフォト提供

エステ家の噴水



アマナイメージス提供

日本庭園 (京都市・実光院)

時間的な水(「鹿おどし」の水) || 流れをせき止め、時を刻む水
空間的な水(「噴水」の水) || 大きな水の造型
音を立てて空間に静止している水

しりと埋めつくしていた。樹木も草花もここでは添え物にすぎず、**「噴水」** 壮大な水の造型がどろきながら林立しているのに私は息をのんだ。それは揺れ動くバロック彫刻さながらであり、ほとぼしるというよりは、**「はっと驚いて息をとめる。」** 音をたてて空間に静止しているように見えた。

時間的な水と、空間的な水。 対句的表現2

◎第三段(形なきものを恐れぬ心)

そういうことをふと考えさせるほど、日本の伝統の中に噴水というものは少ない。せ

日本庭園の作庭

せらぎを作り、滝をかけ、池を掘って水を見ることはあれほど好んだ日本人が、噴水の美だけは近代に至るまで忘れていた。伝統は恐ろしいもので現代の都会でも、日本の噴水はやはり西洋のものほど美しくない。そのせいか東京でも大阪でも、町の広場はどことなく間が抜けて、表情に乏しいのである。

西洋の空気は乾いていて、人々が噴き上げる水を求めたということもあるだろう。

ローマ以来の水道の技術が、噴水を発達させるのに有利であったということも考えられる。だが、人工的な滝を作った日本人が、噴水を作らなかつた理由は、そういう外面的な事情ばかりではなかつたように思われる。日本人にとって水は自然に流れる姿が美しいのであり、圧縮したりねじ曲げたり、粘土のように造型する対象ではなかつたのであろう。

言うまでもなく、水にはそれ自体として定まった形はない。そうして、**「形がないとい**

4 バロック Baroque (フランス語) 一六世紀末頃から一八世紀中頃にかけて、ヨーロッパで流行した芸術の様式。建築や美術においては、複雑で華やかなのを特徴とする。

5 ローマ以来の水道の技術 紀元前四世紀末から紀元後三世紀初めにかけて、古代ローマでは上水道や下水道が整備されており、高度な技術を誇っていたといわれている。

問 「そういう外面的な事情」とは何か。

西洋に比べて湿度が高く、噴き上げる水を求めなかつたこと。水道の技術が、西洋ほど発達していなかつたこと。

*語句

息をのむ

うことについて、おそらく日本人は西洋人と違った独特の好みをもっていたのである。

「行雲流水」という仏教的な言葉があるが、そういう思想はむしろ思想以前の感性に⁶よって裏づけられていた。それは外界に対する受動的な態度というよりは、積極的な、直観的な心の動き。

形なきものを恐れない心の現れではなかっただろうか。

見えない水と、目に見える水。

対句的表現3

見えない水(鹿おどし)の水⁴ 流れを感じる水
目に見える水(噴水)の水⁵ 見る必要のない水⁵

もし、流れを感じることもだけが大切なのだとしたら、我々は水を実感するのにもはや

水を見る必要さえないといえる。ただ断続する音の響きを聞いて、その間隙に流れるも

のを間接に心で味わえばよい。そう考えればあの「鹿おどし」は、日本人が水を鑑賞す

る行為の極致を表す仕掛けだといえるかもしれない。

達することのできる最上のおもむき。

*語句
感性 間隙 極致

⁶ 行雲流水 空を行く雲や川を流れる水のように、一切を自然に任せること。

◎視覚的に理解できる板書例を適宜示しています。

◆板書例

対句的表現

鹿おどし	噴水
↓	↑
第一段 流れる水	噴き上げる水
第二段 時間的な水	空間的な水
第三段 見えない水	目に見える水

第四段 鹿おどし⁴目で見ず、音の間隙に流れるものを心で味わう
日本人が水を見る行為の極致を表す仕掛け



山崎正和 一九三四(昭和九)年。劇作家・評論家。京都府の生まれ。人間を劇的存在と見る人間観をもとに広範な文明批評を展開している。戯曲に「世阿弥」、著書に『劇的な日本人』『鷗外 闘う家長』などがある。本文は『山崎正和著作集5 海の桃山記』による。(一九八一年・中央公論社)

「鹿おどし」の単純で緩やかなリズムが無限に繰り返される様子が、何事も起こらず同じようなことが繰り返される人生のけだるさや徒勞を象徴しているようであるから。

学習の手引き

❖ 「鹿おどし」が「なんとなく人生のけだるさのようなもの」(44・1)を感じさせるのはなぜか、考えてみよう。

❖ 筆者は、「鹿おどし」と「噴水」とを、どのようなものとして捉えているか。本文中から対句的表現を三つ探し、それを手がかりにして整理してみよう。

❖ 『鹿おどし』は、日本人が水を鑑賞する行為の極致を表す仕掛けだといえるかもしれない(48・8)という理由を、本文の内容にそつてまとめよう。

● 「鹿おどし」の立てる音と音との間隙に、日本人は水や時間の流れを感じ取るが、「鹿おどし」は、水を形のないものとして捉え、形のない自然な水の流れを好む日本人の感性にぴつたりと合った装置であるといえるから。

言葉と表現

❖ この文章の構成や展開の特徴について指摘し、その効果について説明してみよう。

❖ 次の語の対義語を調べてみよう。

- ①緊張 ②静寂 ③無限 ④静止 ⑤複雑 ⑥洗練 ⑦理性
- ⑤単純 ⑥素朴 ⑦感性

漢字

緩やか 44・6 徒勞 44・7 静寂 44・8 素朴 45・3 間隔 45・5
華やか 45・6 凝らす 45・14 大阪 47・8 乏しい 47・9 対象 47・14
鑑賞 48・8 極致 48・9

「鹿おどし」は、自然に流れる水そのものを感じさせると同時に時間を間接的に味わわせる装置として捉えている。

「噴水」は、水を人工的に空間に噴き上げさせることによって、西洋人に直接目に見える形で水を味わわせる装置として捉えている。

水の東西 49

◎学習の手引きの解答例を簡潔に記しています。